

道北の湿原

辻井達一

オタドマリ湿原

利尻岳は比較的新しい火山だというが、噴火は早く休止したそうで、そのせいか山容にも、いわゆる火山らしい円さが少ない。ただ、島の形は地図を見るまでもなく正に円形で、いかにも火山島らしい形をしている。

その円形の外縁に近いところに、数カ所の小さな湖沼と湿原がみられる。北端に近い姫沼、東南のオタドマリ沼がその代表的なものである。

オタドマリ沼はその中でもっとも大きいもので、ほぼ半円形の沼と、その南につづく湿原から成る。湿原は沼の沼沢化―陸化によって埋積されたものと思われ、南西部に小さな埋め残された小沼を抱えている。湿原にはアカエゾマツの矮性林が見られ、林床はミズゴケ類が多いが、一部にササが侵入している。この湿原の特長としては、リシリビャクシンがみられることだろう。小さな湿原だが、利尻を含め道北の湿原の一典型とすることができる。

ピアシリ湿原

ピアシリ湿原は、オホーツク沿岸の紋別郡雄武町を南北に貫流する幌内川上流の標高九二〇メートルの山上に展開する周囲約八八〇メートル、面積およそ三七九六五平方mの高層湿原である。

湿原の北西はダケカンバの群生した小高い城壁を回らしたような地形だが、北東と南は開けていて広やかな展望をもっている。

ピアシリ岳一帯の山地は山頂面が比較的ならかな地形を示す開析火山群で、ピアシリ湿原は沼岳(八九九m)からつづくほぼ平坦な熔岩流の上に形成されたものである。水平に近い熔岩面は透水性が低く、湿地をつくりやすい。湿原を構成する群落は比較的単純で群落組成種も多くはない。ツルコケモモムラサキミズゴケ群落、モウセンゴケ―ミカヅキグサ群落が区別され、湿原周辺部にはアカエゾマツを伴うハイマツ―チシマザサ群落がみられる。

浜頓別湿原 浅茅野湿原

オホーツク沿岸は北海道の中でも冷涼な気候のところ、その海岸線の景色にはアラスカや沿海州を思わせるものがある。ここにはまた各所に湿原が成立しているが、その規模は、いずれもそう大きいものではない。

浜頓別湿原は浜頓別のクッチャロ湖周辺にあるもので、クッチャロ湖の湖尻と筑紫川流域にあり、ハンノキ―ヨシ群落が多いが中にアカエゾマツ―コケモモ群落を介在させている。イソツツジ、ヤマドリゼンマイ、ワタスゲ、ヌマガヤ―ヤチヤナギ、ガンコウランアカミノイヌツゲなどを含むこともある。

クッチャロ湖の南には頓別原野、北には猿払川沿いに浅茅野湿原がある。後者にはことにアカエゾマツが多く、北海道における湿原系アカエゾマツ林の残存した好例とされている。

クッチャロ湖を中心として、これらの湖沼、湿原は、いずれも鳥類相の豊かなところで、ことにクッチャロ湖には鳥類観測ステーションが設けられている。

